



卒業に向け、経験と結ぶ言葉を主体的に探究する単元の検討：

自分が経験したこととJ-POPの歌詞を結び付けて書く、単元「My Best 卒業 Song」の実践を通して

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 公裕 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000133">https://doi.org/10.32150/0002000133</a>

# 卒業に向け、経験と結ぶ言葉を主体的に探究する単元の検討

## ～自分が経験したことと J-POP の歌詞を結び付けて書く、

### 単元「My Best 卒業 Song」の実践を通して～

高木 公裕

キーワード 小学校国語科 探究的学習 書くこと J-POP 自分の経験 卒業ソング ICT  
Canva Padlet サブカルチャー

#### 1 研究の目的

本稿は、卒業をテーマに、学習者が経験と結ぶ言葉を主体的に探究することを意図し、小学校国語科における J-POP を活用した書くことの探究的学習を検討したものである。

小学校の最終学年である第6学年。初等教育の義務教育課程を修了したことを示すために、初めて卒業を経験する。この儀式的行事に向かい、卒業式を控えた年度の後半には、様々な教育活動が展開されていく。例えば、卒業文集の作成。学習者達、一人ひとりが思い思いに小学校6年間の思い出をふり返って、作文を書く。6年間の思い出を細やかに書く学習者、6年生の運動会での出来事を書く学習者、一生懸命取り組んだ習い事について書く学習者、将来の夢について書く学習者、それぞれの思い出をそれぞれの言葉で言語化していく。また、卒業制作づくりもある。卒業に向けて、オルゴール彫刻に取り組んだり、学年全体で制作物の作製にあたり、思い出を形にする取り組みである。このように、年度の後半には、思い出を言葉や制作、歌などで表出する様々な教育活動に取り組む姿が、6年生の教室で見られるようになる。そして、もちろん、書くことの領域であるために、書くこと特有の困り感も表出されていく。「何を書いたらいいのか分からない。」「書くことがない。」と題材の収集に困る学習者がいたり、「どんな順序が書けばいいのか分からない。」「書き方が分からない。」と構成や記述の過程で手が止まる学習者がいたり、あるいは、「書き直すのが面倒くさい。」と推敲の過程に煩わしさを感じる学習者がいたりするのは、いくら卒業をテーマにした書くことの実践であっても一筋縄ではいかない。卒業という初等義務教育の節目を迎える学習者にとって、この一連の制作活動が、6年間の経験をふり返り、特別な思いを表出する場であって欲しいと教師は願うだろうが、どうしても、学習者が卒業制作に向かず、主体的になりきれずに学習活動が停滞してしまうことも、ままある。

一方で、国語科教育として、この卒業をテーマにした書くことの研究や実践報告に目をやると、その実践例がほとんど見られない。そこで、本稿では、自分が経験したことと J-POP の歌詞を結び付けて書く単元の実践事例を検討し、卒業に向け、経験と結ぶ言葉を主体的に探究することができる手立ての一事例を示していく。

#### 2 研究課題と単元構想

本稿の研究の関心として、「卒業をテーマにした制作活動において、学習者が小学校生活6年間の自身の経験と向き合い、言葉として主体的に表出するためには、どのような単元を構想すればよいか。」がある。卒業をテーマにした、様々な制作活動において、教師の願いと学習者の思い、あるいは、学習活動の実際にギャップが生じ、学習者にとって、一つの節目であるはずの卒業が、教師からやらされてしまう形式的な学習活動に成り下がってしまうことがある。とりわけ、書くことについては、その傾向が顕著に表れる。拙者は、学習者が、卒業をテーマにした書くことの学習活動に、主体的に取り組むことができない要因について、学

習者の書くことに関わる言語技術や言語運用能力を除き、以下のように分析、考察している。

### (1) 輝かしい経験を表出する場としての卒業制作活動

卒業制作における書くことの活動の題材として、「小学校生活で一番の思い出」や「将来の自分に向けて」が取り上げられることが多い。卒業制作活動は、一般的に、一生手元に残るものとして、ネガティブな題材や自身の経験を抉り出すような題材については取り上げられず、極力、避けられる傾向がある。拙者は、この輝かしい経験を表出する場となっている卒業制作活動が、学習者の書くことの学習活動を停滞させ、言語表現を妨げている要因の一つだと考えている。そもそも、卒業は一つの節目であり、儀式的な要素が強い。小学校6年間の振り返ると、すべての学習者にとって、小学校6年間の輝かしい思い出となっていることは考えづらい。6年間の中で、過去に耐え難い経験をしたこともあったであろうし、今でのそのような思いでいる学習者もいるかもしれない。そのような経験をした学習者にとって、輝かしい経験を書きまとめるのは至難の業である。しかしながら、卒業制作活動が、輝かしい経験を表出する場として機能している以上、そのような学習者たちにとって、真の意味で小学校生活の6年間の振り返ることには繋がらないであろう。

### (2) 経験を具体的に想起することが求められる卒業制作活動

卒業制作における書くことにおいては、経験の具体的な描写が求められることが多い。例えば、小学校生活最後の運動会について書く場合では、どのような出来事があったのか、なぜ思い出に残っているのか、その時、どう感じたのかと、過去の経験に対して具体的に想起することが求められる。長期記憶に長けている学習者にとっては、造作もないことであるかもしれないが、そうではない学習者にとっては、その経験自体を思い起こすところから始めなければいけない。運動会の写真を眺めたり、動画を観たり、あるいは、クラスメイトと「こんなことがあったね。」と対話したりしながら運動会の当日の出来事を何となく想起することはできても、具体的に描写することは難しい。例えば、運動会の練習で友達と衝突したこと、集団演技で仲間と協力して練習をしたことなど実際にあった出来事が経験として残っていない場合もあり、書きたいことが満足に書けないという状況を生むことも考えられる。

### (3) 経験を客観的に表出することの難しさを含む卒業制作活動

卒業制作活動にあたり、書いたものは、文集であったり、文書データであったりに取りまとめて、学級、あるいは、学年単位で共有ができるようにする場合がある。小学校生活6年間の経験を書き綴る場合は、「一生手元に残るから、誰が読んでもいい内容を書こう。」と教師が指導をし、知らず知らずのうちに誰かが読むための卒業制作活動となっている場合がある。そもそも、卒業に対する思いがどのようなものであろうが、その行為そのものについては、極めて内的な行為であるはずであるが、無意識のうちに、卒業制作活動が、誰かのためのものにすり替えられていることがある。このように、誰かが読むことを前提とした卒業制作活動となってしまうことにより、自分自身の経験を語る上では、その表出過程で自分自身はその経験と向き合い、自分のありのままの言葉で書き綴ればよかったものが、誰かにその経験が伝わるようにと自然に求められてしまう。言い換えるならば、経験を客観的に表出する必要が出てくるのである。

そこで、本稿では、この3点の打開策として、J-POPにその活路を見いだす。J-POPの世界では、いわゆる「卒業ソング」と呼ばれる、卒業をテーマにした楽曲が多く作成され、卒業式のシーズンには、幅広い方々から共感を呼んでいる。また、この「卒業ソング」にかかわって、多くのメディアが「10代が選ぶ卒業ソング特集」「30代が選ぶ、卒業ソングベスト10」のように、学生時代によく聴かれた卒業ソングを取り上げて、視聴者の共

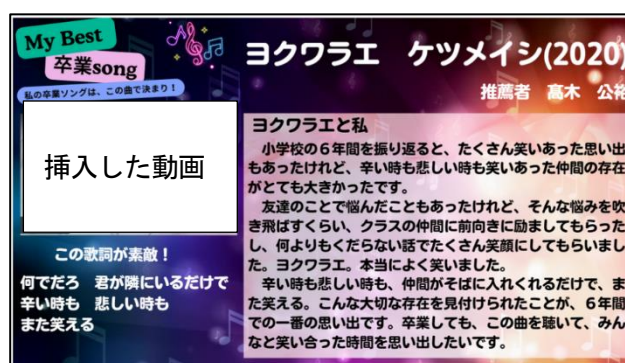
感を呼んでいる。もちろん、卒業という誰しもが経験する普遍的なテーマを取り上げていることもあるが、卒業にかかわって様々な切り口から楽曲の制作がなされているのも、「卒業ソング」が親しまれている所以である。ただし、ルーツを辿れば、作詞家や作曲者が卒業を意図した作品として制作してはいないが、知らず知らずのうちに、定番の「卒業ソング」となったものもある。<sup>1</sup>例えば、レミオロメン(2004)の「3月9日」は、2024年現在も「卒業ソング」として広く認知されているが、JAPAN MUSIC NETWORK「BARKS」(2004)によれば、「レミオロメンが、3/9に3枚目シングル「3月9日」をリリースする。この印象的なタイトル曲は、2002年の3月9日に結婚式を挙げた友人のために作り、実際にその式でも演奏したというものなのだ。」とあり、そもそも「卒業ソング」ではなく、友人へ向けた「結婚ソング」として制作されたことが分かる。しかしながら、「3月9日」に描かれている歌詞の意味を多くの大衆が卒業のイメージと結び付けるということが起こったのである。そのような意味で、「卒業ソング」とは、卒業という節目について大衆の共感を呼ぶことを意図して制作されたものと卒業という節目を意図して制作してはいなかったが、大衆が「卒業ソング」として解釈したものがあり、卒業という経験と言葉が極めて近い位置にある。

そこで、本稿では、この「卒業ソング」の歌詞に着目し<sup>2</sup>、学習者が主体的に経験を言葉で表出することができる単元を構想することとする。

### 3 単元「My Best 卒業 Song」の概要

卒業に向けた自分自身の経験と言葉を主体的に結び付けることを意図した単元として、「My Best 卒業 Song」を構想した。

本単元では、学習者が選択した「卒業ソング」とその歌詞に対応する卒業に関わるエピソードを書き綴る言語活動に取り組むこととする。実際に選択した「卒業ソング」を視聴しながら、学習者が書いたエピソードを読み、共有することができるように、プレゼンテーション用アプリである「Canva」を用いて、1枚のスライドとしてまとめることとした。資料1は、拙者が作成したモデルである。以下は、単元の概要である。



資料1 拙者が作成したモデル

#### (1) 単元の概要

**単元名** My Best 卒業 Song

「大切にしたい言葉」(光村図書6年)

**実施日** 令和5年12月8日から令和5年12月18日

**対象** M小学校6年生 36名

**単元目標**

<sup>1</sup> 他の例としては、「仰げば尊し」は、西洋音楽のメロディを基に、日本語の歌詞を載せ、音楽教材とした。卒業式で多く歌われるようになったのは、映画「二十四の瞳」(1954)の影響が大きいとされている。そのため、本稿では、「卒業ソング」とは、卒業を迎えるにあたり、学習者の経験と合致する歌詞を伴った楽曲とする。

<sup>2</sup> J-POPを「サブカルチャー」として捉えた国語教育実践研究の第一人者として、町田守弘氏の実践も多く見られるが、本稿では誌面の都合上、割愛させていただく。

- ・語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。 (知識・技能)
- ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。 (思考・判断・表現)
- ・経験と言葉を結び付け、見通しをもちながら、粘り強く書き進めている。 (主体的に学習に取り組む態度)

## (2)単元の計画

時	学習活動
0	・単元「My Best 卒業 Song」の学習の見通しをもつ。
1	・単元で取り組む言語活動と出会い、単元の学習に見通しをもつ。 ・自分の経験と合う「卒業ソング」を探す。
2	・自分の経験と合う「卒業ソング」を探す。
3	・Canva に歌詞と結び付けたエピソードを書きまとめる。
4	・Padlet に出力し、自分の卒業ソングをカテゴライズする。 ・次の作品に取り組んだり、友達作品にコメントを書いたりする。
5	・単元のふり返しをする。

## (3)単元のあらまし

単元は、5時間で計画をした。単元の学習を始める前の0時目。前単元のテスト終了後に、本単元の予告を行った。拙者が作成した学習モデルを示しながら、それぞれが自分の経験とぴったり合う「My Best 卒業 Song」を選択し、経験と歌詞を結び付けて一枚のスライドに書きまとめていくと伝え、おおまかな学習過程を共有した。さらに、「卒業ソング」を視聴するため、自宅にイヤホンがある人は持参するように伝えた。「おもしろそう。」という声があちらこちらから聞かれた。

1時目。授業が始まる前から、学習者たちは持参したイヤホンを耳に当て、それぞれのタブレット PC 使って、「卒業ソング」に聴き浸っていた。休み時間に教室を出ていた学習者たちも、「もう始めていいんですか?」と急いだ様子でイヤホンを準備して、授業の開始時間を迎える。単元の概要は、前日に説明をしていたので、Canva の動画の挿入方法や背景の設定など、これまでに使うことがなかった機能の操作説明をし、それぞれの「卒業ソング」を探す時間とした。教室は静寂に包まれていた。すでに「卒業ソング」の見当がついていた何名かの学習者は、Canva を使って、「My Best 卒業 Song」の制作に入った。学習者たちは、複数のブラウザを立ち上げ、音楽を視聴しながら別のブラウザの歌詞に目を通していた。選択した「卒業ソング」は、いわゆる定番の「卒業ソング」からアニメやゲームのテーマソングまで幅が広い。「どうしてこの曲にしたの?」と問うと、学習者たちは、はっきりとした口調で自分のエピソードを語っていた。数名は、「家でもしてきます。」と自主課題として持ち帰っていった。また、休み時間でも「取り組んでいいですか?」と制作に取り組む学習者も数名おり、授業時間外でもヘッドホンを耳に当て、学習に取り組む姿が見られた。

2時目。「卒業ソング」を探す学習者と「My Best 卒業 Song」の制作をする学習者に分かれた。休み時間



資料2 Padletによるカテゴライズ

や自宅で取り組んできた学習者たちは、一作目が完成をしていたので、交流型掲示板アプリ Padlet に出力をして、自分の卒業エピソードが、どのようなトピックに当てはまるのかカテゴライズする方法を伝えた(資料2)。カテゴリには、1作目が終わった学習者の中から、「友情系」「スポーツ系」「努力系」などが挙げられた。

3時目、4時目は、それぞれの課題に向き合いながら、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりすることができるように工夫を重ねていった。クラス全体で77作(一人平均、2.13作品)の作品が出来上がり、5時目に制作した作品をお互いに鑑賞する時間を設けた。

#### 4 経験と言葉を主体的に結ぶことに関する検討

##### (1) 経験と言葉を主体的に結ぶことについての検討

経験と言葉を主体的に結ぶ<sup>3</sup>ことについて、学習者Aの姿を追いながら検討をしていく。学習者Aは、国語科の学習に対して苦手意識が高いと述べ、学習活動についても見通しをもって探究することができずにいた。しかしながら、この単元では、ヘッドホンを持参し、授業中はもちろん、休み時間や自主課題として自宅で制作に取り組み、13作品もの「My Best 卒業 Song」を仕上げている。学習活動のエピソードとともに、学習者Aの学習活動の実際についてまとめていく。

##### 負けないでと僕

学校で、先生の名前を書くところで、友達に何回も何回も書いても、消される。それでも先生はこの歌「負けないでもう少し最後まで走り抜けて」と言ってくれて僕は頑張ろうと思った。先生が歌ってくれた「負けないで」これのおかげで頑張ろうと思った。やっぱり先生は最高だなとそのときに思いました。これが1番の思い出です。卒業してもこの歌を聴き続けたいです。(ママ)

##### 資料3 学習者Aの作品 ZARD「負けないで」(1993)

資料3は、学習者Aによる1作目の作品である。学習者Aは、この単元が始まったとたん、「もう曲は決めました。」と力強く言い放ち、Canvaを使って制作に取りかかっていた。1時目の終わりには、「もう少しでできるので、休み時間も取り組んでいいですか。」と言い出し、その日に1作目を完成させていた。帰りがけには、「家でも取り組みたいので、新しいデータをください。」と申し出ている。

1作目は、ZARDの「負けないで」<sup>4</sup>(1993)を選曲し、6年生の頃のエピソードを書き表した。教室の出入り口付近に、チョークを使って記入をする簡易黒板があり、学習者Aは、教師の名前と共に、みんなが元気になるような言葉を書き記していた。しかしながら、教室の出入り口付近にあり、ちょうど学習者の手元の高さに位置していることから、無意図的にも書き記した内容が消えていたことがあった。そのたびに、この「負けないで」を教師が口ずさみながら励ましていたというエピソードを思い出し、「My Best 卒業 song」にまとめていた。クラスの学級委員を経験した学習者Aは、入り口の黒板に教師の名前とみんなが前向きになるような言葉を添えることを自分なりの仕事として位置付けていたが、その思いとは裏腹に、「また消えています。」と報告してくれることがあった。決して第三者のいたずらがあったわけではないが、無意識によりかかった学習者の背中で消されていたことも多々あり、学習者Aと教師にとっては、二人とその周囲の友達しか知り得ない微笑ましいエピソード

<sup>3</sup> ここでいう言葉を主体的に結ぶとは、「My Best 卒業 Song」の単元目標に示しているように、自分なりに経験と言葉を結び付け、見通しをもちながら、粘り強く書き進めている姿とする。

<sup>4</sup> 坂井泉水作詞、織田哲郎作曲。b. gram B-Gran RECORDSによる。

である。

この「負けないで」は、いわゆる定番の「卒業ソング」とは言い切れないが、学習者Aにとっては、6年生の学校生活の一部を想起する「卒業ソング」となっていたと考えられる。「もう決めました。」と力強く言い切ったのも、運動会の応援練習で、この曲を候補曲の一曲として挙げたのが学習者Aであったことも起因するが、この単元の学習と教師がロズさんでいたエピソードが経験と言葉を結び付けたものだと考える。

#### かくれんぼと僕

空手でS県とK大会は優勝だけど、全国大会では優勝はできない。2歳から空手をやっていて、全国大会は5回出て、ベスト8までしかいけない。お母さんは頑張ったねというのが、僕は全く気が済まない。歌にもある。「どこまで堕ちていけるかはわからない」友達が、学習者Aなら優勝ができるよと言って、歌である「カウントダウンは始まっているよ」この言葉のように練習を頑張りました。だけど、勝てない。今年の夏休みに、全国大会にいったけど、やっぱり勝てない。一度僕はやめようと思ったけど、みんなが応援してくれた。だから頑張った。もう空手はやめるけど、部活終わりに聞きたいです。この歌はととてもいいです。(拙者が一部改変)

#### 資料4 学習者Aの作品 A I i A「かくれんぼ」(2019)

資料4は、学習者Aによる3作目の作品である。学習者Aは、資料3にある1作目を終えた段階で、2作目を自宅で仕上げてきており、この3作目は、2時目の授業時間に制作したものである。学習者Aは、3作目に、A I i Aの「かくれんぼ」<sup>5</sup> (2019)を選曲し、小学校六年間取り組んできた、空手のエピソードと歌詞を結び付けながら、作品の制作にあたっている。都道府県大会や地方大会で優勝した経験があったが、学習者Aにとっては、全国大会で優勝するのが大きな目標であった。何度か全国大会に挑戦をしたが、その度に挫折を味わい、「どこまで墜ちていけるか」の歌詞と当時の心情を重ねている。また、それでも、前を向いて、「カウントダウンは始まっているよ」と、最後の大会にかけた思いの強さを表現している。

学習者Aは、3作目の制作にあたり、選曲に時間をかけていた。空手のエピソードと合致する歌詞を探していたのである。この「かくれんぼ」もまた、定番の「卒業ソング」とは言い切れないが、学習者Aにとっては、懸命に取り組んだ空手を象徴する「卒業ソング」となっていたと考えられる。

#### ありがとうと僕

僕は、あんまりありがとうと言えない時があります。この歌を聴いて、サビのところで、自分に言っているみたいで、ありがとうとすぐ言おうとしています。6年生になって、たくさんしてもらってありがとうと言えました。だけど、言えない時があります。歌詞の「ありがとうって伝えたくて」のところを何回も聞くと、ありがとうとちゃんと言おうと思いました。小さいころからありがとうと言えないので、何かもらったりしたらちゃんと言うように心がけています。前も悔しいときに、励ましてくれた人にありがとうと言えました。この歌のおかげだなと何回も思いました。(拙者が一部改変)

#### 資料5 学習者Aの作品 いきものがかり「ありがとう」(2004)

<sup>5</sup> SLIDE SUNSETによる、ミニアルバム「Alive」(2019)に収録。

資料5は、学習者Aによる6作目の作品である。6作目には、いきものがかりの「ありがとう」<sup>6</sup>(2004)を選曲し、感謝のエピソードを書き綴った。この作品の制作にあたり、学習者Aは、さまざまな「卒業ソング」を聴き耽っていた。その中で、この曲を選び、ストレートに「ありがとう」と伝えきれなかった経験と少しずつ感謝の気持ちを伝えられるようになった自分の成長について書きまとめている。

学習者Aは、その他にも、運動会で応援団長をした経験を Vaundy の「怪獣の花唄」<sup>7</sup>(2020)や6年間の成長を SG の「僕らまた」<sup>8</sup>(2016)に経験と歌詞を結び付けながら、書き綴っていた。学習者Aは、13作品を熱心に完成させただけでなく、その一つひとつの制作にあたり、エピソードを絶対的に象徴する資料3のような作品を書き上げたり、資料4にあるように、具体的なエピソードにふさわしい歌詞を選んだり、あるいは、資料5にあるように、定番の「卒業ソング」リストの中から、経験と合致する言葉を結び付けて選曲したりと経験と言葉の結び付け方を工夫しながら学習を展開していった。

## (2) 誰にとってもできるということについての検討

卒業をテーマにした単元であるため、誰にとってもできるような単元を設計することは極めて重要な要件である。そこで、本項では、特別支援学級に在籍する学習者Bのエピソードを中心にまとめていくこととする。

この単元では、本人や特別支援学級担任の希望もあり、自閉症・情緒学級に在籍する2名の学習者も交流学級で共に学習を進めることとなった。その機会になったのは、0時目である。自閉症・情緒学級に在籍する2名は、個別の支援を要するという理由で、国語科の授業を交流学級で受けることはなかったが、中学校進学を見越して、単元末テストだけでも交流学級で受ける経験を少しずつ積んでいた。そのような中で、テスト終了後に、本単元の概要を知ったことで、本単元への関心が非常に高まったと特別支援学級担任より話があり、交流学級で共に学ぶ運びとなった。

学習者Bは、不安感が強く、理不尽なことを許すことができない。友達とのトラブルがあるわけではないが、整理することができない自分の心と常に向き合い、藻掻き苦しんできた。しかしながら、最上級生となった6年生の学校生活では、運動会でリレー選手に選出されたり、体育科の学習で活躍の場を見いだしたりと自信を取り戻したこともあり、過去の自分と向き合いながら、作品の制作にあたっている。

### この曲と私

僕がこの曲を選んだ理由は、このモンスターと僕の境遇が似ているような気がしたからです。

まず、このモンスターは、幼体と成体があり、脱皮によって変わります。その過程で、本来一匹しか脱皮しないのを脱皮が少し遅れて、この不完全な姿になったという感じの設定があり、

悲しきモンスターです。僕と似ているところが、「不完全」というところに目を付けました。

僕は、あの時こうすればよかった、こうしたかったという後悔していることがあり、それをやっていたら今は悔いがなかったと言っては過言ではないほどの充実した生活を送っていたかもしれないので、今の自分から見て落ちぶれている＝不完全という点で、この曲を選びました。

それと、この曲は途中で結構変わるので、今までの6年間を表しています。(拙者が一部改変)

### 資料6 学習者Bの作品 MH:RS「渾沌に呻くゴア・マガラ」(2023)

<sup>6</sup> エピックレコードジャパンからCD シングル・デジタル・ダウンロードで2010年5月5日に発売。

<sup>7</sup> SDR / Vaundy Artwork Studio よりリリースされたアルバム『strobe』の収録曲。

<sup>8</sup> SuperGenius Entertainment より2021.04.04に配信された。



資料6は、学習者Bの1作目である。学習者Bは、1作目に、MHR;Sの作中BGMでもある「渾沌に呻くゴア・マガラ」<sup>9</sup>(2023)を選曲し、ゲームに登場するモンスターと小学校生活6年間の自分を重ね合わせていた。学習者Bは、いわゆる「卒業ソング」に関心がないことと、どうしても1作目にこの曲を選びたかったとのことで、まず、歌詞がない曲で経験を言葉にすることとした。1作目からは、ゲームに登場するモンスターの設定と自分自身の境遇を重ね合わせ、たくさん経験した公開を「不完全」と表現している。ただ、それだけではなく、曲調の変化にも目を付け、6年間の経験がそんな「不完全」なものばかりでもなかったと考えていることが分かる。

#### RAGEOFDUST と私

僕がこの曲の中で一番気に入っている歌詞は、サビの部分の全体です。「勝ち取りたいものもない無力なバカにはなれない。それで君はいいんだよ。キリキリと生き様をそのために死ぬる何かをこの時代にたたきつけてやれ」という歌詞のサビです。僕がこの曲を選んだ理由は、歌詞の最初の部分の「必死になって輝いて六等星まるで僕らのようだ」という歌詞の部分がまさに僕の輝いていなかった3年間ぐらいの時期があったので、この曲と同じようだなと考えました。サビの、「無力なバカにはなれない」僕も、そんな馬鹿にはなりたくないとずっと思ってきましたし、今は、過去と比べて無力ではないと思っています。努力の賜物だと思っています。(拙者が一部改変)

#### 資料7 学習者Bの作品 SPYAIR「RAGE OF DUST」(2016)

資料7は、学習者Bの2作目の作品である。学習者Bは、「歌詞がある曲を知りたい。」とタブレット端末を使って、琴線に触れるような「卒業ソング」を懸命に探していた。その中で、学習者Bは、SPYAIRの「RAGE OF DUST」<sup>10</sup>(2016)を選曲した。2作目も1作目と同様に、過去の輝けなかった経験を「必死になって輝いて六等星まるで僕らのようだ」という歌詞に重ねつつ、「勝ち取りたいものもない無力なバカにはなれない。それで君はいいんだよ。キリキリと生き様をそのために死ぬる何かをこの時代にたたきつけてやれ」という歌詞の前段にある「無力なバカにはなれない」と挑戦することさえ逃げてきた自分への自戒の念を込めつつ、「今は、過去と比べて無力ではないと思っています。努力のたまものだと思っています。」と前向きに小学校生活を捉えようとしていることが分かる。

学習者Bは、その後、3作目に大好きなゲームの挿入歌を選び、モンスターと性格が共通点や中学校生活へ向けて、このような強く愛されるモンスターようになりたいという思いをまとめていた。学習者Bにとって、小学校生活6年間は、決して輝かしいものではなかった。このような思い出を掘り起こし、書き綴ることも大切ではあるかもしれないが、学習者Bが知りうるゲームの世界のモンスターとその境遇を重ね合わせたり、経験と歌詞を結び付けたりしながら、自分自身の小学校6年間の客観的にふり返り、中学校生活への活路を見いだそうとしている姿が分かる。

学習者Bのように、決して満足することができない学校生活を送っている特別支援学級の学習者たちも多くいる。もちろん、これは、特別支援学級に在籍する学習者達に限ったことではないが、そのように不遇と感じる学校生活を経験した中でも、歌詞やその背景にある設定と経験を言葉で結びつけることにより、自分自身の不遇な経験を他の対象と重ね合わせることができ、自分自身の経験を他の視点からも解釈することができる、主観的な経験をより客観的に捉え直す機会になっていたのではな

<sup>9</sup> MHRS「モンスターハンターライズ;サンブレイク」(2023)のBGMとして展開されている楽曲。

<sup>10</sup> 2016年11月9日にSony Music Associated Recordsから発売された。

いかと考える。

## 5 成果と課題

本稿では、自分が経験したことと J-POP の歌詞を結び付けて書く単元の実践事例を検討し、卒業に向け、経験と結ぶ言葉を主体的に探究することができる手立ての一事例を示すことを意図してきた。卒業という節目に向かって、卒業制作や卒業文集など、学習者達の思いを形に残す取り組みは、もはや全国どの学校においても当たり前に行われていることであろう。しかしながら、この取り組みに自分事になれない学習者達がいることも確かである。その点、国語科教育の視点からこの卒業に向けた取り組みを捉え直すことは有益な視点の一つとなっていると考える。

単元「My Best 卒業 Song」の具体的な成果として、J-POP の歌詞と自分自身の経験を結び付けることに関して、3つの方法で学習者は、経験と言葉を結び付けていたことが明らかとなったことを挙げたい。

一つは、経験の中にある J-POP の楽曲を取り出し、歌詞と言葉を結び付けることである。例えば、運動会の学校行事等で実際に使用されていた曲や習い事の帰りの車で家族と一緒に聴いていた曲など、実際の経験の中に J-POP が位置付いており、その経験をそのまま言語化した例がこれに該当する。言い換えるならば、言語生活の中に埋め込まれていた J-POP を「卒業ソング」として掘り起こし、その歌詞をもって意味づけしたのであると考えられる。

二つは、自分自身の経験から J-POP の歌詞を結び付けることである。例えば、学習者 A の空手の経験をまとめた資料 4 がこれに該当する。これは、小学校 6 年間で象徴するような経験は想起できている状態で、その経験と結び付ける言葉を探究するというものである。言い換える名ならば、学習者の言語生活の外から、自分自身が知らない曲や歌詞を結び付けるにふさわしい「卒業ソング」を取り込み、経験を意味づけしたものであると考えられる。

三つ目は、J-POP の歌詞から自身の経験を結び付けることである。例えば、卒業にかかわる経験が想起できない場合がこれに該当する。いわゆる定番の「卒業ソング」を聴きながら、自分自身の経験と結び付くような歌詞を探究し、合致する経験について書き綴るというものである。言い換えるならば、言語活動の外にある「卒業ソング」の歌詞を出発点とし、自分自身の経験を客観的に意味づけしたものであると考えられる。

いずれにしても、学習者が主体的に経験と言葉を結び付けることができた大きな要因として、極めて主観的であった自分自身の経験を J-POP の歌詞という既存のサブカルチャーを経由することで、客観的に捉え直すことができるようになり、経験の想起やその表出にかかわる問題が軽減していったものだと拙者は結論付ける。

一方で、共有の仕方には課題が見られた。本単元では、交流型掲示板アプリである Padlet を用いて、作成した「My Best 卒業 Song」の交流を行った。それは、従来の卒業文集のような媒体であれば、誰かが読みやすいように書き表したはずのものであるが、実際には読んだ感想を交流するような場が得られにくいからである。このような意図から、Padlet の掲示板機能を使い、コメントの交流を行ったのだが、一部見られた制作者の個別的経験への共感的なコメントを除き、そのほとんどが楽曲のよさに言及されたものばかりであった。本単元では、学習者の経験を極めて閉じたものとして表出するばかりでなく、それが、客観的な共感を得ることができることを意図して、Padlet を使用した交流の機会を設けたのだが、共感を得るような経験と歌詞の結び付け方であったり、歌詞の描き方であったりと「卒業ソング」ならではの単元としては課題が残った。

卒業は、誰しもが経験をすることであるが、それが、必ずしも輝かしいものであるわけではない。卒業制作を、その場で取り繕った偽りの輝かしい思い出とするのではなく、国語科教育の立場から、言葉を通して、自分自身の経験を再発見する機会と捉えたいものである。

### 主な引用参考文献・URL

- ・首藤久義 「国語を楽しくープロジェクト・翻作・同時異学習のすすめ」 2023年 東洋館出版社
- ・池田匡史 「主体的な言語生活者の育成」のために J-POP 歌詞が持つ可能性 2015年 国語教育学 11
- ・鈴木孝典 「国語科指導におけるポピュラー音楽の教材化：多面的な思考を促進するために」 2022年 国語探究 1
- ・JAPAN MUSIC NETWORK「BARKS」(2004) <https://www.barks.jp/news/?id=52337450>
- ・町田守弘 「サブカル国語教育学」 2021年 三省堂
- ・町田守弘 「国語教育を楽しむ」 2020年 学文社
- ・町田守弘 「サブカル×国語」で読解力を育む 2015年 岩波書店
- ・町田守弘 「国語科の教材・授業開発論ー魅力ある言語活動のイノベーション」 2009年 東洋館出版社
- ・町田守弘 「国語教育の戦略」 2001年 東洋館出版社
- ・Atwell Nancie 「In the Middle - A Lifetime of Learning About Writing, Reading, and Adolescents -thirds edition.」 2015 Portsmouth,NH:Heinemann.
- ・ナンシー・アトウェル 「イン・ザ・ミドルーナンシー・アトウェルの教室ー」 2018年 三省堂
- ・高木公裕 「学習者が選択する読書パートナーを活用した探究的学習の展開ー学習者が〈相手〉を選択する言語活動の可能性についてー」 2023年 国語論集 21
- ・高木公裕 「共通作品を分かち合う読書パートナーを活用した探究的学習の展開ー学習者が〈相手〉を選択する言語活動を設定した、単元「あの人と読む『やまなし』のナゾトキレター」の実践を通してー」 2023年 国語探究 4

### 謝辞

本稿の執筆に際し、多様な視点からご示唆を頂いた、国語探究研究会の皆様、ならびに国語を学ぶ会の皆様に深謝いたします。

(たかきこうゆう／佐賀県吉野ヶ里町立三田川小学校)